（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	小嶋ちひろ
論文題目	The Theatricality of Everyday Life in the Plays of the Children of Paul's （聖ポール寺院少年劇団の劇における日常の演劇性）		

（論文内容の要旨）

本論文の狙いは、1599年から1608年頃までロンドンの中心地で活躍した聖ポール寺院少年劇団による、ロンドンの市民生活を描く四作品を、当時の劇場環境や劇場空間などの諸条件を考慮に入れながら分析し、その特性を明らかにすることにある。その結果、ロンドンの市民生活に潜む演劇性をこれらの作品が示していることを指摘し、さらにその表現手法を明らかにしている。

第一章は、個々の作品分析の前段階として、聖ポール大聖堂を中心とするポール行政区と劇場の特徴を考察し、ポール行政区は、ロンドン市民の生活の中心地として、あらゆる人々が集まり、お互いが見る、見られるという演劇性を意識する場所であったことを確認している。

第二章は John Marston 作 *What You Will* (1601) を取り上げ、第一章で指摘されたような演劇性が作品に取り込まれ、登場人物たちが、常に周りからの眼差しによって恣意的に解釈されており、相互理解の難しさが示唆されていることを指摘している。劇中、旅先で死亡したと思われていた商人 Albano は帰還するものの、彼の外見そっくりに変装した人物が現れることによって偽物との区別が付かなくなり、Albano は共同体から拒絶される。偽物と判断された今、Albano の内面を伝えるはずの言葉は演技と解され、相互的なコミュニケーションは不可能となる。このような関係は劇世界に蔓延しており、言葉はしばしば見世物の一環として受け取られてしまう。さらに最終場においては、人と人とが関係を結ぶ唯一の方法は、眼差しを共有するという観客的なあり方であることが示唆されている。*What You Will* の提示する一見荒唐無稽な人間関係は、衣服が個人のアイデンティティーを保証するものでありながら同時に流通品でもあった初期近代イングランドにおいて、他者からの眼差しに対するアイデンティティーの危うさを反映しているといえよう。

第三章は Thomas Middleton 作 *A Mad World, My Masters* (1605) に描かれる女性の主体が演劇的なものとして表象されていることを指摘している。本作の高級娼婦の Frankは、自らの不可視の身体空間を偽ることで男性を騙す。彼女は処女を装うことで男性客から金を巻き上げ、さらに身体の内部変化すなわち病気を演技し、男性の視線を引きつけて彼らの解釈を意のままに操る。特に、彼女の病気の演技の表現に、観客が見ることができない舞台奥空間が活用されることによって、女性の演技の構造が観客に切実に伝えられている。しかし舞台上で大きな力を発揮する女性の演技は、男性の女性に対する好奇の視線を前提としていることが次第に明らかとなる。本作は、女性が日常において密かに演技し男性を欺いているのではないかという男性の不安を、舞台上の女性の演技

を見る男性登場人物、さらには観客の体験を通して表現しているのである。

第四章は、Thomas Dekker と John Webster 共作の *Westward Ho* (1604) において、妻に浮気をされた所謂寝取られ男の表象について、登場人物たちのロンドンから西への移動に関連させて考察している。初期近代イギリスにおいて、妻に浮気された夫には額に角が生え、公共の笑い者になるという俗信が存在したが、本作品においてこの俗信は、妻の演劇的な振るまいと重ね合わされながら表象されている。例えば、本作の妻たちは密かに筋書きを練り、その中の役割を夫に演じさせ、自分たちはロンドン市内、そして市外へと夫の目の届かない空間へと移動する。一方、市外へと妻を追いかけてきた夫が直面するのは、妻のいる空間から押し出され寝取られ男として人々の好奇の目に晒されるという危機である。結末において彼らは妻を許しロンドン市内に戻るが、ここにおいて彼らの危機が回避されることも示される。本作においては、ロンドンの都市空間は劇中で表象される娼館のように壁で仕切られており、壁の向こうではいかなる関係にも人々の目が行き届かないことが示唆されているからである。当時の社会通念では、夫は妻の行動や人間関係を制御するものとされていたが、*Westward Ho* は寝取られ男の表象を通してその反対の可能性を演劇的に示している。すなわち、分断が進むロンドンの都市空間内で夫は妻の筋書きの中の駒として操られ得るという可能性である。

第五章は、Middleton 作の *The Puritan, or the Widow of Watling Street* (1606) におけるはみ出し者の学者 Pieboard の計画と、ロンドンの表象との関係について考察している。Pieboard は社会から疎外された者として計画を生み出し、社会の外側から状況を操る危険な存在であるが、徐々にその計画の中の一つの役を演じる当事者としての側面が強まり制御を失う。一方、作品の空間表象は、前半においては抽象的であるが、徐々にロンドンの具体的な場所を指すようになり、観客の現実に近づき、最終的には、観客の実際の所在すなわち劇場と、虚構世界の位置が近似する。自由な存在であった Pieboard が社会的に束縛されていく動きが、劇空間がロンドンの一つの特定の場所に限定されていく動きと重ねられているのである。これは聖ポール寺院少年劇団による自己言及的な表現とも解釈できる。劇団はロンドン市民の日常空間を自在に、多様な角度から上演していた。しかしその実、その上演も劇場という場を通してあくまでも都市の中に組み込まれているのである。

このように、聖ポール寺院少年劇団によるこれらの作品がロンドンと個人との関係、個人間の関係性、あるいは女性のあり方といった市民生活の諸相を取り上げ、ロンドンの都市空間と関連づけながら、そこに潜む演劇性を、極めて洗練された劇作術を通して表現していることを本論文は明らかにしている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は1599年から1608年頃までロンドン市内で活躍した聖ポール寺院少年劇団のレパートリーから、ロンドン市民の日常を描いた作品、John Marston 作 *What You Will*、Thomas Middleton 作 *A Mad World, My Masters*、Thomas Dekker と John Webster 共作の *Westward Ho*、Middleton作の *The Puritan, or the Widow of Watling Street* を取り上げ、その演劇的特質を分析するものである。市民の生活を描いた当時の作品群は city play と呼ばれ、イギリス演劇研究の対象となってきたが、少年劇団による上記の作品は、日本国内のみならず英語圏における演劇研究においても、分析の対象となることが少なかった。本論文の独自性は精緻な分析を通してこれらの作品がいかに巧みに演劇という芸術媒体の特徴を活かして作られているかを明らかにした点にある。

特に、従来の批評において city play は、当時急速に変化を遂げるロンドンへの風刺作品として、あるいはそうした巨大都市の空間を捉える作品として扱われてきたが、本論はそうしたテーマにさらに踏み込み、これらの作品が、都市生活と演劇との類推、あるいは演技というモチーフを使用することによって、個人のアイデンティティーや人間関係の危うさを当時の観客に示したことを指摘し、さらに、その表象方法について緻密な議論を展開した。この点でイギリス演劇研究における意義深い貢献が見られる。

具体的には、第１章においては、当時のロンドンにはどのような特徴があったのか、特に、聖ポール寺院少年劇団が上演を行ったポール行政区にはどのような特徴があったのかを近年の学界の研究成果を十分に取り入れた上で詳述し、Josette Féral の指摘した「日常における演劇性」というテーマを用い、当時のロンドンの市民社会に潜む演劇性を鋭く指摘している。ただ、第２章以降の分析においては、必ずしも常に Féral の見解が有用であるわけではなく、他の種類の演劇性にも言及がしばしば及ぶので、本章において本論文全体における Féral の見解の意義を強調することに関しては、より慎重な姿勢が必要であろう。

What You Will に関する第２章では、視線、衣装、言葉といった演劇上演の要素が、劇世界の人間関係の表象において頻繁に言及されることに注目し、本作が、演劇の比喩を使いながら、個人のアイデンティティーが、人々の視線や衣装といった視覚的なものによって規定される危うさを表現したことを、説得力をもって論じている。

A Mad World, My Masters に関する第３章では、女性登場人物 Frank による自らの身体、特に外からは見えない身体内部を利用した演技に、当時の医学言説なども参照しながら着目するだけでなく、観客が舞台を見る行為と男性登場人物が女性登場人物を見る行為を結び付けて議論を進めており、本作の自意識的ないしメタ演劇的特徴とその効果を明らかにしている。

第４章は、夫が妻の行動を規定するという当時の考え方とは反対に、*Westward Ho* では妻が夫の行動を規定していることを指摘する。特に、本作がこれを示すために、妻の演技性を前面に押し出したり、観客から見える空間／見えない空間の差異を巧み

に利用していることを明らかにしたことも、本作の自意識的な劇作術に迫ったという点で高く評価できる。

第５章は *The Puritan, or the Widow of Watling Street* を論じ、社会からのはみだし者 Pieboard が詐欺行為によって社会を翻弄するが、最終的にはその社会の秩序の中に取り込まれていく様を、Pieboard による演技的行為と、地理的に曖昧な空間からより具体的なロンドンの空間へと物語が移行することに注目することで明らかにした。さらに、本章は、こうした Pieboard の表象の中に、都市生活を風刺する聖ポール寺院少年劇団が自分たちも結局はその都市の一要素であるにすぎないと認める自意識も鋭く指摘している。

このように、本論文は、これらの作品が演劇という芸術媒体の様々な特徴を、しばしば自己言及的ないしメタ演劇的に引き出しつつ、洗練された劇作術を通して、ロンドンという都市空間における人間関係やアイデンティティーの危うさを表象したという重要な指摘を行っている。英語の文章に関しては、学術的な語彙が積極的に使われているものの、それが効果的に使用されているところと、反対に論点が複雑化し読みにくさを招いているところがある。後者に関しては今後の論文執筆において、改善の余地が認められる。また、本論文は少年劇団のレパートリーを扱っているものの、少年俳優による演技がどのような効果を生んだのかといった分析は少ない。これは残された資料の少なさにも起因するが、今後はこういった側面にも、より大胆に立ち入った議論が期待される。しかし、批評の光が当たることが少なく、現在、上演の機会も少ない、これらの作品が、いかに演劇的に工夫が凝らされているか、そしていかに鋭く都市生活における人間関係の複雑さ、危うさに観客の注意を喚起したかを明らかにした点は十分に評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年９月６日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降